

箱
根
七
湯
の
枝
折
(その三)

東
都

沢
田
秀
三
郎
釈
註

弄 文
花 窓
纂 校
輯 正

Seven Hot Springs of Hakone
(HAKONE NANAYU NO SHIORI)

translated by
Hidesaburo SAWADA

七湯の枝折

卷ノ九

東都 文應 校訂

弄花 纂輯

○目 録

- 一 曾我兄弟墳図
- 一 二十五菩薩岩図
- 一 多田満仲塚の図
- 一 元賽河原の全図
- 一 同地藏形燈籠図
- 一 應長ノ碑
- 一 湖水眺望

○此巻やあなち湯の事に用なきやうなれともすべて療客のならひ連日の積鬱にたえず割^替子さゝえにけふハ其所の神社あしたハ彼所の眺望と己がまに／＼うかれ歩くしるへともなれかしと追ひ加へしなりされハひらやかなる所に至りてハむしろ敷枯えだ拾ひての螢火打に爛鍋の尻をこかして石ふみの文字をてらせバ彼のから人の勤学の慮をおもひたきほこりの白雪に袖打はらひてハ影もなしと詠しうた人の大和たましひヲ慕ふめくらす盃の朱夕日もかゝやきてハ道もせの菫紫を奪ハるそも／＼宮根の古道といへるハ富士の根かたより竹の下足からの関を経て駒ヶ嶽のすそをめくり二子宝蔵ヶ嶽より湯もと山ニかゝり酒匂川の上を越わたりて大磯へ出る今ある街道ハ近頃の事にして元弘建武のころハ専ら足柄の関にかゝりて通行せし事なり故に足利新田等の両雄も竹の下足柄にて度々いとみ合ひし事太平記に委し其外竹の下古街道なる事

諸書に出る

太平記

末如月の初ツカタ寒カヘリタル中天ノ雲間ニ富士ノ白々ト雪ノ高根ヤ吹下ス足柄山ノ峯ヨリモ其方ノ空ト三島江ヤ芦間ニ隠ル眞鶴ノ千代ヲ經ニケリ竹ノ下谷ノ戸出ル鶯ノ初音ヶ原ノ朝霞 下略

(五八)



図30 曾我兄弟ノ墳の図

続拾遺

平 時長

足からの山のふもとに行着て一夜やとかる竹の下みち

風雅集

為相 女

足からの山の嵐の跡とめて花の雪ふむたけの下みち

同

藤原頼成

深き夜に関の戸出て足からの山もとくるゝ竹のしたみち

○曾我兄弟虎墳又兄弟のもとよりを埋し所として髻塚といふ

此墳芦の湯の方よりいたれハ道の右の方二子山の裾にあり台石とも高サ八九尺もあるへし横巾いづれも三尺土人曰いにしへより兄弟の塚と虎の塚を別所にわかち置けバ一夜の中にもとのことくひとつ所へ集りよると覚束なき説なから聞しまゝにするす又兄弟の墳といふもの所々にあり酒匂川の東曾我中村とて昔し兄弟の住し跡とて墳墓ありまた富士の裾に一ヶ所宮根権現の社地に一ヶ所あり但し石祠にてうらに正保四亥九月廿八日相州小田原城主稲葉美濃守越智正則造之トあり此内いづれか眞跡ならんか追て可考此辺すへて芒々たる荒野にて人家一字もなき中に幾許の星霜をふりしにや苔むせし古墳そかしこにありて実に懷古の情おこりぬ右兄弟が墳の横の方に長□寺の文字かすかにのこるしかれば此所古の街道にてさるべき寺院なとありて人々の霊をまつりしものにや

(釈註 曾我兄弟ノ墳の図(図30) 入る)

巻かりの道やわすれすうつほ草 涼袋

夏草の強みも折れて花野かな 弄華

(釈註 弘法作 二十五菩薩岩ノ図(図31) 入る)



図31 二十五菩薩岩ノ図

○又曾我の墳より行事纔にして左の方に三稜ある岩ありて地藏仏三
 躰を彫れり夫より又行事三丁斗にて右の方に弘法大師二十五菩薩
 岩としるしたる標石立り叢の中を二三歩行ハ大岩ありて是にも地
 蔵を彫り先の三躰と合して二十五躰なりとそ土人いふ此仏をかそ
 へみるに幾たひかそへみても同じからすとそ此岩のかたち至て雅
 にして苔深く所々に山柘生ひひとへに臥し虎のことく大家などの
 庭石に用ひハ其價幾万斤なるべくあたらず雅石に佛躰を彫りて疵つ
 けしハ浮屠子註3の常とはいひながら可惜事なりき数彫れる中に左之
 方に一所自然石を仏躰のうへにひさしのことく切りかけしあり其
 傍らに左のことき文字見ゆ尤所々かけそんし字躰さたかならず其
 見しまゝにするす

實名三郎二郎同李兵藤四郎六郎二郎後藤四郎清二郎同李兵右法
 平玉入道孫次郎隨心浪三郎得日唯○主佛弥太郎入道平四郎大刀
 隨心丹力源藤四郎權守太郎檢校三郎

永仁元年八月十八日□一結衆等——敬白

右志者——靈法界——衆生平等利益也

如斯の文字ありて所々欠損し且たしかならざる字躰多し此石仏を
 大師の作といへとも弘法大師ハ宝亀五年に生れて承和二年三月廿
 一日に入寂す此年より右の永仁元年迄の間凡四百五十九年を経た
 り大師入滅註4の後に彫玉ひしにやいふかし永仁の比ハ後深草の院の
 御宇にて執權北条貞時なり此年鎌倉小田原辺大に地ふるふて人多
 く壓註5ニうたれ死す依之併せ考れハ右の三郎二郎李兵藤四郎なども
 同しく震のために死せしを里民哀れみて此地にうつみ此の地藏を
 供養せしものとおもはるいつくにてても大師の作とさへいへば年数

前後の差別なく諸人渴註5向信用する事是大師の鴻徳なるべし
 ○多田満仲の墓

右二十五ほさつより半丁ほと行て右の方にあり高サ壹丈余の図の
 ことき古墳なり満仲ハ経基の嫡男にて摂津国多田に住しよつて多
 田の満仲となふ多田三昧院において祝髪し終もこゝにとり玉ふ
 千時長徳三年の事なり今自作の木像を安置す又此古墳の臺石に年
 号あり永仁正安の文字のみたしかにみへて跡ハさたかならず其外
 一方に左のことき文字あり

(釈註 満仲墓ノ図(図32) 入る)



図32 満仲墓ノ図

一方ニ

結縁地——需

武名四郎左エ門尉平實政

及日光源氏女源宗経

眞□實法八田氏女三善宗俊

西念淨心我法七寶□日

號阿一如坊平氏女為父母

平威氏躰妙吾妙

什群僧需田隨求陀羅尼持者

大工大和国所生左エ門太夫 大藏安氏

願以此功落普及於一切我等與衆生皆共成仏道

正安二年八月廿一日

右正安二年ハ関東疫病流行して人多く死し比なり武石四郎左エ門等一類皆此難にかゝりて死せしを此所にはうむりしものなるへししかし願主明かならず大工左エ門太夫大藏安氏ハ此時の石工なるへし願以此功落よりの文ハ願主の言葉なるへし満仲の墓にいかでかくのごとく万霊の名を彫入へきや且つ満仲の死せし長徳三より此正安まで其間凡三百年の歴数を経たりいよゝ疑しき古墳なり尚武石等の姓名^{註6}について考あるへしいかにも大造なる墳なり

○夫より少しく行て左のくさむらの中に方貳尺斗の小堀あり是を弘法の硯水といひならへせりいかなる事にて此名ありや所謂さたかならず

○爰を過て二三丁に西の河原地藏堂あり其下に庄司ヶ池とて横四五丁さし渡し一丁斗の池の汀に古碑あり是を應長の碑とて近世専ら紙にうち珍重す其字躰和らく至て美事にて女筆とおもへる此碑近きところ迄正面のかた土中に倒れ埋れありしを芦の湯戸嶺戸溪戸丘等力を告してもとのことく建起せしとそ碑の形あらましを左にうつす

(釈註 應長碑の図(図33) 入る)



図33 應長碑の図
(図中の説明：此所かけそんしあり)

右志者為過去

靈成仏得道

之也 藤原氏女

應長元年七月八日

家六十人之以是万

敬白○

(釈註 元賽の河原の全図(図34 A・B) 入る)

稲つゆのいそがしふりや二子山 柳居

○元賽河原地藏堂 満仲の墳より三四丁山を登て左のかたにあり

地藏堂ハ萱葺にて方三間四面岩より作かけの堂なり尊蔵ハ弘法の

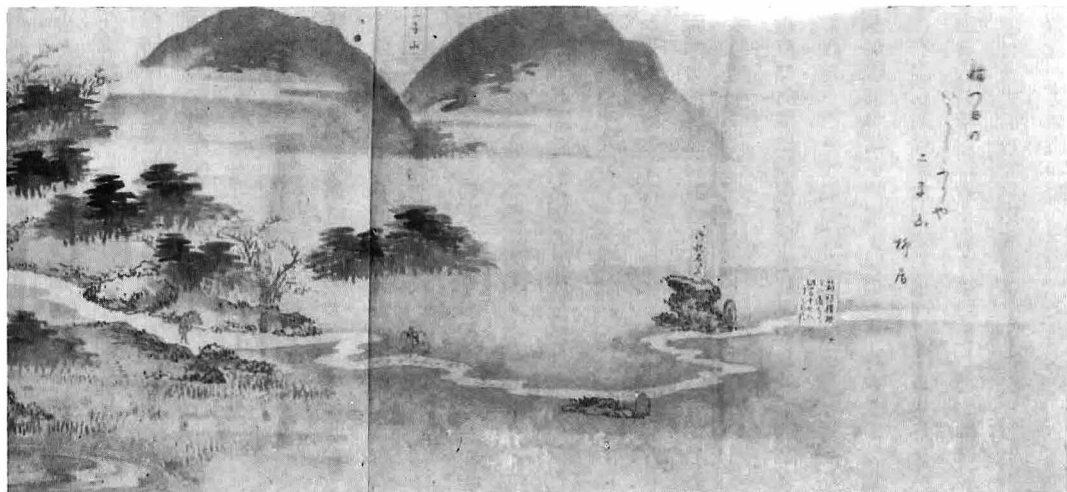


図34B 元賽の河原の全図(その2)

(図中の説明：箱根権現えの通なり此間十七八丁もあるべし)

(六一)

作にて高サ壹丈余の石仏なり但し自然石を以て彫れハ常に清水し
だたり苔生して床落桁朽て蝙蝠すまひをなしいと物さひしき所也
又堂の傍らに石燈籠一柱あり地藏形とて世に名高し其外小き地藏
尊幾つともなくそこゝにたてり此所より権現坂まで行程二十八
町ありて右地藏仏を一町毎に置とぞ此堂むかしハ今ある所應長の
碑のかたはらにありしを中むかしの比此上道ニ引うつして爰を本
道とせしとぞ十二光仏ハ此道の傍らにありしも今ハ本街道西のか
はらにうつせり則五堂のある中眞中の白地藏といへるは是なり八
百比丘尼の墓ハ應長の碑のむかひ庄司ヶ池のみきハにある是也庄
司ヶ池又生死カ池とも書くよし此地の砂原に時として小児の足跡
幾つともなく押有事ありとそ是ならず猿のたくひの足形なるべし
奇を好む者のいひ出しなるへし又道の傍らに小石あまた積重しハ
何ものゝわさにや此辺前後廿丁斗人家絶たる野徑にて辱さへもの
凄き所なれハ中／＼小兒なと来遊ふ所ニもなく全く往来の旅人の
業なるへく思ひながら何となく無常を催し実にくらきよりくらき
に迷ふ生死流転の世の中夢かとおもへハまた目の当り死出の山の
名ありて六道のちまたもほど近かるへし

蓮の芽ハ水の下なり仏生会 五 風

○二子山 ○景物○杵○落葉○霧○月○鹿

武州金沢下野にも同名あり喜撰法師か二子の山のふた心のうたハ
下野にてよめるなり

○駒ヶ嶽 又駒かた山とも



図34A 元賽の河原の全図(その1)
(図中の説明: 芦ノ湯ヨリ西ノ河原権現えの通也)

一説に此石燈籠を地藏形といふ誤にて火袋の地藏尊と見ゆるハ
秋尊の徒弟の火司神^{ヒツカ}の形をえりし者にて火司神形の石燈籠と名付
るよし

○元賽の河原地蔵堂の前にあり但し宝珠なく高サ三尺余火袋八寸棹
石七寸筭石七寸臺石ハかけそんず茶人専ら愛玩するよし古ハ
六地藏とて六柱ありしか今漸く壺本残れり東都藩邸に一ツ井伊候
に一ツ根岸与力に一ツ八丁堀もゝやの隠居一ツ所持するよし甚タ
古雅なる形にて石のはだハ極上のみかけと見ゆ年数凡七百年來の
ものとぞ東都にある中いつれの燈籠にや太刀疵二ヶ所ある有是を
化地藏といふとそ

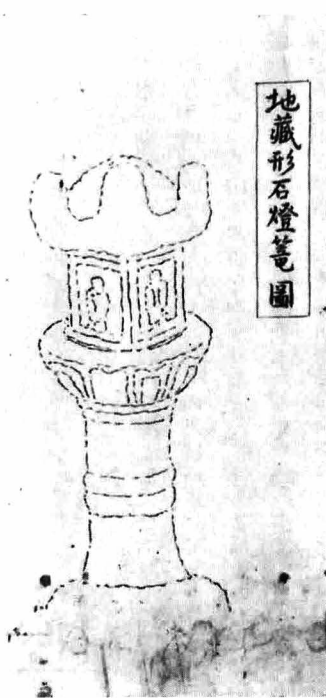


図35 地藏形石燈籠図

山上に駒形の神社あり殿前に駒を彫たる石ありて常に水をたゝへ
たり旅人誤て此水をふめハ必雨ふるとそ其外くらかけ石とて山の
額より三間斗さし出し奇石あり又爰に登らんとすれハ忽ち雲起り
て山のすかたを見せずといふ

(釈註 地藏形石燈籠図(図35)入る)



図36B 湖水眺望の図(その2)

(図中の説明：宮根湖水一名ハあしのうみといふ、
権現の社ハ此山のうしろにあたる則湖水の汀也)

○薺の池

地藏堂より十二三丁行て往還の左の山二子山の根ばりにあり方五六丁の池なり

○御状石又五条石とも

往来左の方にあり高サ五尺横巾八尺斗上平にして甚タの雅石也つたへいふ頼朝此上にて状をしたゝめしよりの名なりと

(釈註 元賽の河原権現坂の辺より遙に湖水

をのそむ図(図36A・B)入る)

今よりはおもひみたれしあしの湖のふかき恵を神にまかせて

光行

湖を今出た色や秋の富士

五絃

○此宮根の湖といへるハ又の名を芦の湖ともよひて富士^{註7}八湖の其一とつなり所のさまいとあやしうものあはれにしてわたり三里巾一里もあるへく山々の腰をめぐりおとろくしきほとの有様湖中の島を堂嶋となんいひて何某の上人とかや此島根にて一万巻の誦経ありし跡なるよし今ハ爰に弁才天を崇め祭れり花表ハ島の裾にたちて幽に見ゆ箱根権現ハ山の上にしつまりおハし東福寺ハ汀にあり五郎か船繋岩ハ磯端にのそみ元はこねといへる賤か家居あつま橋賽の河原なと皆此証にあり伊豆駿河の山々ハ湖を隔て遙につらなり復赤^{はら}といふ魚も此うみより出るとそ此湖に漁りする海士凡人に限れるよし誠や年ことの水無月中の三日ハ権現のみまつりとて湖中沖の護^{註8}檀に三石三斗何かしの供御を備へ逆櫓して帰ると



図36A 湖水眺望の図(その1)

(図中の説明：元賃の河原より権現への通此道廿八丁アリト云)

かや末世の今も神威いと尊し七ツの津々も皆此浦にこそ景色絶にしてからの大和のうた作る人も東へ下る旅ねにハ必此山の湖水を詠めぬハなし霞ひく春の曙花守の告まつ比や駒ヶ嶽も青柳の鞭にいはひ夏ハ高根の雪をひたして時しらぬかげを洗ひ雨を含める山あいのをかりし葉の秋もいろは催ふす文庫山視を囲ふ屏風山立廻したる峯々の雪明を妨ぐにたよりあり実にいみしき山水の面目画図にうつしかたく述るに言葉なし世に名たゝる人の記行文章ハなほ十の巻に出す見ん人よろしく併せみるべし

九の巻終 是より十の巻へつゝく産物
價付等迄くわしくのする

註1 割子〓辨当のこと。ささえ〓酒をいれる携帯小竹筒か。

2 一字〓原文には草かんむりあり。

3 浮屠子〓仏教徒のこと。

4 入滅〓入滅。

5 渴向〓渴仰。

6 姓名〓姓名。

7 富士八湖〓山中、河口、西、精進、本栖の富士五湖に富士沼(柏原沼又は浮島沼)、四尾連沼、芦の湖の三を加えて富士八湖といふ。

8 護尸壇〓護摩壇。

七湯の枝折

巻ノ十

東都 文窓 校訂

弄花 纂緝

〇目録

一 宮根権現略縁起 並宝物

一 同湖水古歌紀行

一 産物図考 並製方

一 七湯雜費附 並人足駕籠賃等

一 姥子の説

一 四時勘考

○ 宮根山権現社 宮根湖水の北にあり社領二百石
別當東福寺例祭六月十三日

祭神

○ 中央○彦火々出見尊○右木花開耶姫命○左瓊々杵尊

末社

○ 駒形神○大師堂○行者堂○薬師堂○上人堂○高野社○曾我祠○阿

弥陀堂○獅々巖○能善祠○御供所

同略縁起

○ 夫當山の初ハ聖占上人幽居の地にして神威をあかめ寿齡九百余歳を保しとかや孝安帝の御宇に湖水の中に目代木^{註1}を建て相豆驢三国の堺とし欽明帝の御宇に韓国の高根権現を勧請し此山のかたち梵篋に似たればとて宮根山と号け湖中の怪石を観音巖といひ又一宇^{註2}をたてゝ普門品を誦す今の湖中の堂島是なり厥后役小角登山し行基大士も昇臨して東福寺と号し山岳林泉に名境多しとて都卒の内院に表して四十九ヶ所の名にたとふ天平勝宝年中にハ万巻上人鹿島明神の神勅を蒙り錫を止め当山ニ練行する事三年此時宮根三社権現を崇めて上人を中祖とす諸経の誦誦一万巻に及びけれハ爾^{註3}已来諸人萬巻上人と呼ふ又湖水の西の渕に九頭の大龍有て時々風波を起し人民をなやます上人彼の深淵に臨んで神咒したまへバ毒

龍水上に現す即鉄鎖の咒縛し玉へハ大樹のもとに繋れて永く当山の守護神たらん事を佐る此繫れし樹を栴檀香木といふ弘仁七年にハ万巻上人勅をうけて上洛し帰路三州楊那郡に於て入寂す徒弟其遺骨を当山に藏め佛像経巻ハ豆州田方郡に一寺を建て是におさむ是を桑原山新光寺といふ又の名を小宮根とも号す其後孝謙天皇より嵯峨帝まで七代の帝王尊敬有て神社仏閣巍然たり弘法慈覚の両大師も爰に止錫し花山の院皇子豊覚法親王當山の座主に任せらる此時はしめて金剛王院の勅額あり此法親王の弟子安慶當山の別當をつとむ同弟子行^空僧正もこゝに來りて別當となる武門にハ田村將軍源賴義賴朝北条時政義時泰時時宗等皆尊敬し曾我兄弟祐つねを討し微塵丸薄緑の太刀も後賴朝より當山に寄附し玉ひて什物となる其外宝器多し時去りて小田原合戦の時兵火に罹^{あは}て失ひぬ今存する所十二三品をしるす

をしるす

○ 宗近ノ太刀○友切丸無銘也長サ二尺五寸○清府ノ大刀赤銅つくこしらへ萬から草

○ 長蘭ノ太刀無銘にて所々切込アリ○ 赤木さす腐付て鞘よりぬけす拵赤銅作波ニ竹ひしとめしとぞ

○ 夜光の玉○天羽衣○駒の角○九穴の貝

○ 櫛○鈴弘法大師婦朝の具也○独鈷同上○鹿玉○時宗ノ状

○ 時宗の自筆の文とてあり其うつし

夜前々隣火忽消費寺安隱悦千万委細可申面謁恐惶謹言

時宗

東福寺方丈

按するに此時宗とあるハ北条時宗なるべし五郎時宗の文跡とハ見えず

○箱根湖 又芦のうみともいふ

箱根山の絶頂にあり富士八湖の其一なり湖の長サ三里さしわたし一里余中に左尾崎右尾崎三ツ石堂しま等の名あり腹赤鱒の魚名産とす味ひことに美なり

光行紀行

猶行過るほとに筥はかりなる山の中にいたりて水うみふかくたへたり筥根の湖水となづくまたあしのうみともいふ権現垂跡のものとひけだかく尊し朱樓紫殿雲にかさなれるよそほひ唐家の驪山宮かとおとろかれ巖宝石龕の浪にのそめる影は錢塘の水心寺ともいひつべしうれしきたよりなれば浮身のゆくへしるへさせ玉へなどいのりて法施奉るついでに

光行

今よりハ思ひ乱れし芦のうみのふかき恵を神にまかせて
寂蓮集

十月はかり東の方にまかりけるに筥根といふ山をなん越へける所のさまあやしくよの常にかはりけり遙に峯にのほりてハ湖をわたる谷ニ下りてハ雲をふむさるほとに風の木の葉をまくりあけて時雨のふもとよりのほりければ

寂蓮

慶融

旅のそら雲ふむ峯を越ゆかんしくれハ袖の下よりそする
玉くしけ筥根の山の峯ふかく湖はれてすめる月かけ

深草元政身延紀行

山上有湖水 一望洗客腸 雲變含雨色

天鏡變風光 當得塞翁意 何言西子粧

身來箱根頃 却似在餘杭

湯釜の説

○右湖水の際筥根権現華表の左之方に大釜二口有つたへいふ源頼朝富士の御狩の時の陣釜といつれにも古物と見ゆる釜のまはりに銘あり左ニうつす

一曰

大筥根山東福寺湯釜一口満山大鼎別當法橋上人位隆實 文永五年



図37 筥根権現湯釜ノ図

(図中の説明：口のわたり凡四尺許高サ四尺一二寸もあるへし此方ハ鏝と思ふ所かけそんじて全きかたちをなさず寸法右ニひとし但し此方ハ鏝の所あきやかにして所々かけそんず二つとも石をあつめて臺となせり)



図39 産物の図および説明文

魚を用ひ女子にハ雌魚を服さしむ此魚のとれる比ハ弥生の末より
う月はしめ比をさかりとす其ある所ハ溪谷清水の流れに住む或ハ
丘にもあがり木などにも登る是をとるに法あり大かた小雨降る夜
なと松明をともし身ニハ簀かさうち着て扱溪川の岩間に右の松明
を木のえた杯に立かけいかにもしつかに身をひそめおれバ松明の
あかりに付て魚集りよるとそ其時石をとりけ手つらまへにして
竹の筒に入れ持帰る也此竹筒といふハ節一つをこめて切り口ハ少
さく穴を穿ちてはせんをさし置也右とりたる魚ハ塩をふりかけて
殺し日に干し乾すなり此魚当山ニとるを地魚と唱へて形大キク功
尤よろし又大山辺にてとるを旅魚とて形少サく切も又うすし求る
人よく／＼弁ふべし

管根草ノ図 (石長生)

管根山中に生すすへて湿瘡るいニ此草を剪じて蒸しあらへバ邪毒
を去りかわかすとぞ茎ハむらさきにしてひとへに張かねのごとく
至て美事也是をすきや簀木に結ハせて用るに甚タ雅なる者也

一輪草図 又梅草梅花草ともいふ (うめばちさう)

此草ハ一茎一葉一花なり花形白梅のこつく少しく青色ありて花ひ
ら委く／＼かゝえひらく但し秋草にて仲秋の比をさかりとす近世
是を押花にして或ハ扇にすき入れ又ハ婦女の衣のよう等に染る
に甚タしほらしくやさしきもの也

明礬 芦の湯明凡山より出ル

芦の湯明ばん山の半腹に明ばんわき出ル所あり其近辺の小石ニ花
のごとくまとひ付てあり色ハ少し黄にして青白こも／＼交り其製
別に出ス

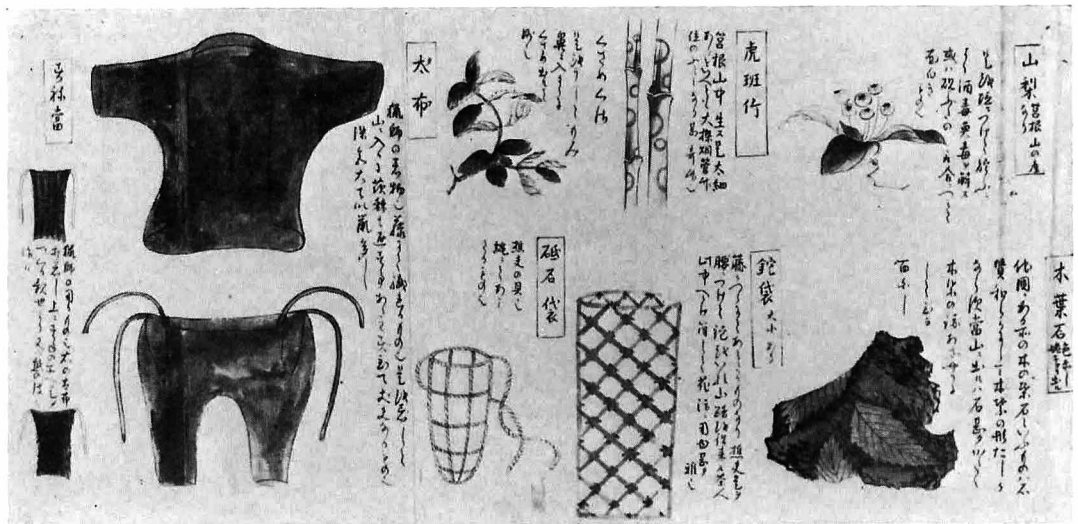


図40 産物の図および説明文

釣鐘つゝじ

枝葉ハ常の躑躅のことく花形つりかねのことく皆下に向てひらく^{註5}

是も又芦湯ニ多し

筍根蛇骨（硅華）

底倉より多く出ル功能血をとめ濕瘡などに麻油にて解付てよしとす

湯の花芦ノ湯産也

他國ニくらふれハ此所の湯花白甚タ白し功能硫黄ニ似て少し異なり濕瘡ニよし湯本臺の茶や辺ニて是をあまた見せ先ニひさく

山梨筍根山の産なり

是を塩ニつけて貯ふニよく酒毒魚毒ヲ解ス或ハ硯^{註6}ぶたの取合ニつみて面白きもの也

木葉石色赤し姥子ヨリ出ル

他國ニある所の木葉石といふものハ石質和らかにして木葉の形たしかならず當山ニ出ルハ石甚タかたく木葉の跡あざやかにして至而面白し

虎班竹

筍根山中生ス是太細ありといへとも大概烟管竹位のふとみなり甚

奇竹也

鉈袋大小あり

藤かつらにてあみたるものなり樵夫是ヲ腰ニつけて鉈をいれ山路を往来ス茶人此中へかけ筒して花活ニ用ゆ甚タ雅也くさめくさ

是ヲ干してもみ鼻ニ入るゝにくさめ出ること妙也

砥石袋

樵夫の具也繩にてあみたるもの也

太布^{タフ}

獵師の着物也藤にて織れるもの也是を着して山ニ入るに茨棘も通ず事あたわず至て丈夫なるもの也染色大てい鼠多し

すね當

獵師の用るもの也右の太布打着し上ニすねの所へ是ヲつくり觀世より又ハ熊の皮にて作る

○植物類

一米^{註7}鄮躑

明ばん山ニ多く生ス

一馬酔木

あせみといふ葉ハ茶の葉のこつく花ハ至て白く花ひら五ツあり芦の湯辺殊ニ多し

一遅さくら 芦の湯の桜ハ高山故にや花こせて細かし四月ヲ盛とす大て

い芳野多し

○藥品類

一細辛

宮根山中より出ル功能臍疾をのそく薬店是をかまくら柴胡

柴胡

といふ

一胡黄連

味苦く小兒疳症^{註8}驚風を治す

○木石類

一神代杉

千石原より多く出る杉戸ニ用ゆ本細密にて見事なり巾五六尺迄あり

一火打石瓦

宮城野辺より出る石質かたく色黒し火の出る事常の石より多しくらまの火打石ト同物也

○魚虫類

一鱒魚

箱根湖水より出ル他国より大キクして味ひよろし

一腹赤

同断

一かしこ蛙

堂ヶ島の谷川ニアリ其声ひぐらしのことし

一ぼたる

底倉尤よろし形大キク光至てつよし

○禽獸類

一鶯

時鳥 雲雀 山鷗 鹿 猿 兎 鷹

右之類いづれも沢山なり取わき鹿の腹^{註9}竈ニ上品あり

○野菜類

一秦の大根

秦野といふ野に生ス此大根種をまかすして自ラ生ス世ニは

たな大こんといふハ是なり

一狗脊^{註10}

宮根一山いつくにてても生すといへともわけて宮城野の方より多く出ル味美に和らかし

一蕨

同しく宮城野辺多し

○湯ノ花ノ製

芦の湯にて多く製す其法芦の湯の湯の流れ捨る下水の両きしに凝りつくを桶に汲とり扱四五尺の水舟に菰を敷其上ニ右の湯を柄^{註11}抄もてよきほどにそぎかくれハ水ハ下へもれて湯花のみ菰にとままるを貝さくしやうのものにてすくひ板ニのせて日にかハかし干しかたむ是ニ干法ありて口伝とそ芦の湯の里民のわさなり

湯花もと硫黄より出ル本草記文十一卷ニ

和銅六年元明天皇御宇相模國信濃國陸奥國三ヶ國奉獻硫黄

右相模國のうち別ニ硫黄出ル山なし則芦の湯の上硫黄山なるべしされバ此所より硫黄生ずる事久し

○姥子の湯

此湯明礬湯にして専ら眠病によしとす此所ハ湯小屋一軒にして間毎あまたあり宮城野千石原辺より来りてなりはひとするよし尤此湯極寒の節ハ不涌漸く春彼岸過より湧出し五六月比者沢山出るとぞ故ニ其うち斗りの湯宿なれハ常は甚タ淋しき所なり芦の湯達ノ湯に是似たり上の山を冠ヶ嶽とぞ爰よりも明ばん出る又千石原よりみくりやえかゝり沼津のかたへ出る道あり

○四時勘考

筧なせる山のかたち東西ハ低して浅く西北は高して深し魚鼈禽獸沢山にして七湯ともに寒つよく暑うすし就中山の半より上芦の湯の方ハ寒氣殊につよく春は鶯つはくらめ雲雀山鳴蛙等多くすみれ山吹梅櫻山うど露わらび狗脊椎茸杯よろし櫻ハ山の半腹より下ハ花形大キク半より上ハ花少サク枝こまやかにみ木こせて甚面白し大概ハ四月をさかりとす常盤木にハ松杉栢竹にハ名にしおふ筧根竹繁茂す夏ハ四月のすえニ漸く暑氣を催し時鳥早く啼て鶯と声を交ゆ桑しらべの類是を伐て名物の挽物とす杜若白百合さつきの類花至てうるハしく清水尤清し螢ハ甚タ大キクして光りつよく極暑といへども半より上ハ蚊帳をたれす茶芽芥葉を手製して家々に貯ふ他へハいさざ田畑も相應にありて一己の用ハ足りぬへし土用中も朝夕ハ袷を着す秋は残暑速ニさりと虫類音を入る事早し桃楓紅葉する事深くす蘭石こく姫かつら豆荳岩ひばの類路傍に多し暮秋にははや時雨をさそひ雁早くわたり猪鹿跡を交ゆ栗は実をむすハすして落あをちかハらひわつづみ夥しく冬ハ鶺鴒早く来り霜雪折々降て木の葉ハ秋の末よりふるひ落て湯客も此比ハ只近郷のもの許也又此山中にふゞきといふあり旅人尤恐るべき事なり雪

(七二)

深き年ハ殊に用心すへし七湯とも挽もの師并塗師多し家居の板戸皆上々の神代杉にして至て古きあり魚るいハ小田原より運び登り芦湯えハ三しまの方よりも来ル甚タあざらけし味噌醬油酒之類も上品ニて價ハ山の高下を論せずして等し干菓子類ハ上品ハ價甚タ尊し

跋

卞和^{註12}氏の璧も其人を得されハ其明をいたす事あたハす千里の馬も伯樂をえされハその足を伸る事なしこゝに文窓弄花の二士ハ故を温ね山水を好の癖あり凡山水に名あるもの遠として至らざる處なく高として登らざる所なし此春や陽炎の麗に催されて玉くしけ宮根なる温泉にまかる山川幽谷の美相海眺望の壯觀所として眼をよるこハしめざるはなし此行やあたに見過くさんもほいなしとて温泉山の来由古蹟墳墓古より云ひもて来れる俚言の誤りなとたゞし矢立の墨してかいつけ帰りぬ弄花ハ画の道に絶へたるをもて山川の美相海の眺望有の儘に摸し居ながら其景色をしらしめ文憲は神社佛閣の由来古蹟驛路くさくさの事まで筆して見んものをして温泉療客の行くにもやすからん事をしらしめ一部十巻とはなしぬ此功や弄花なくんハ誰か山川相海のおもむきを知らん文憲なからましかハ此山の開闢古蹟墳墓の来由を知らんこたひ十校九掲はしめて筆を脱す余に跋せよといふ僕や天質奴才重ぬるに老耆をもつて固く辞すれとも不肯せちに貢玉へば逃るゝに所なく唯両士の功をおろ／＼かひつけて後へにしるす文化八辛末の年九月 七十翁



図41 七十翁の跋

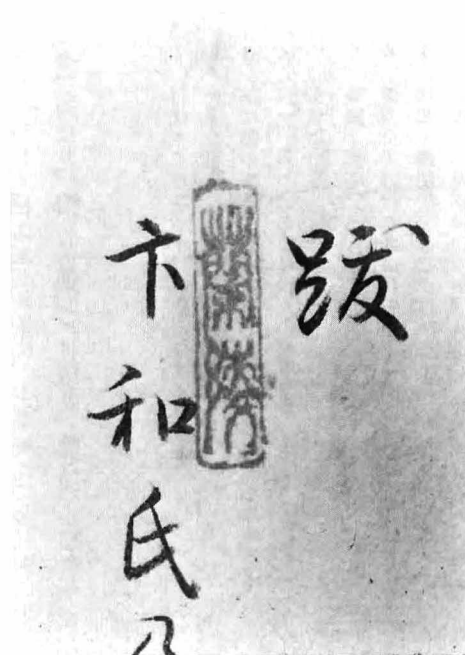
図42B 七十翁跋の尾印
東州及び源定孝印（註13）

図42A 七十翁跋の肩印 蘭陵（註13）

「七湯雜費並人足駕籠賃等」つたや本に欠けているので関靖氏によりて補う（神奈川文化箱根特輯号二三―二五頁、昭和十五年十二月）

「七湯價附」

一並旅籠一人前 但し一夜切のつもりにて昼飯はなし
夜食より朝食迄のつもり 二百文
一同一廻り一人前但し食具代もこめて 金毫分と二百文
一幕湯一廻り 是は己れ入らんとする時幕をはらせ
て余人をいれざるなり 金毫分
一雇ばゝ一廻にて但し食事は此方にて賄ふ 四百文
一夜具代一廻にて但し並夜具という 夜具二百文
絹夜具は定りなし ふとん百文
一客まき代 但し三把つゝ一束にて
一炙治代一廻にて 是は底倉に限る病の軽重によりて定
なし 十六文
一燈明代 但し熊野権現常灯明代とす

七湯より所々へ人足駕籠代附

○湯本より 但し駕籠は人足 〇塔の沢より
小田原へ 但し二人のつもり 百五十文 小田原へ 百五十文
塔の沢へ 一人に付 百文 湯本へ 百文
堂か島へ 百七十二文 堂か島へ 百五十文
宮の下へ 同 木賀へ 二百文
底倉へ 同 芦の湯へ 二百七十二文
木賀へ 二百二十〇文 宮の下へ 二百七十二文
芦の湯へ 三百文 底倉へ 二百文
○堂か島より 此所は峻岨の山坂なれば人 〇木賀より
足一人に付二十八文まし 小田原へ 三百文
小田原へ 二百五十文 湯本へ 二百二十八文
湯本へ 百七十二文 塔の沢へ 二百文
塔の沢へ 百五十文

宮の下へ 三十八文

底倉へ 同

木賀へ 百文

芦の湯へ 二百文

〇宮の下より

小田原へ 二百五十文

湯本へ 百七十二文

塔の沢へ 百五十文

木賀へ 百文

芦の湯へ 二百文

堂か島へ 百文

宮の下底倉へ 七十二文

芦の湯へ 二百文

〇芦の湯より

小田原へ 四百文

湯本へ 三百文

塔の沢へ 二百七十二文

堂か島へ 二百文

宮の下木賀底倉へ 百七十二文

畑廻り小田原迄 三百文

但し人足畑より来しは前日に申付
へき事也

此外姥子宮根新屋長興山地獄廻り等々定直段あれと略す、但し七湯より江戸日本橋迄通し駕籠代、上湯場にて金三両二朱、下湯にて金三両なり、附ケ荷物□目限り、餘は酒手増なり

註1 目代木けくら木、中心となる木の意味。

2 一字＝原文には草かんむりあり。

3 尔は爾の略字、爾時のあやまりか。爾時はその時の意。

4 (黒色)とあるは後人の補筆なり。以下(石長生)(うめばちそ
う)(硅華)も同じ。

5 躑躅＝躑躅(つゝじ)。

6 硯ぶた＝口取りざかなを盛るひろぶた。

7 躑躅＝躑躅(つゝじ)。

8 驚風＝小兒脳膜炎の類。

9 腹籠＝胎児の意で薬用に供すか。

- 10 狗背Ⅱぜんまい。
- 11 柄杓Ⅱ柄杓（ひしゃく）。
- 12 卞和氏の璧Ⅱべんかし所有の宝玉。
- 13 七十翁敗の印Ⅱ七十翁の敗の肩に一個陽刻二・五センチ×〇・六センチ蘭陵、尾に陰刻二・〇センチ×二・〇センチ東州及び陽刻二・〇センチ×二・〇センチ源定孝印二個あり。三個いずれも朱印なり。

おわりに

沢田秀三郎

全文完結にあたりその間絶えず激励して下すった温泉研究所長大木博士に重ねて御礼申しあげたい。

又、温泉研究所員牧野・平賀・荻野・平野・伊東の五君には一方ならぬ御足労を煩した。印刷所の方々の御配慮も並々ならぬものであった事と思う。諸君と喜びを願いたい。

七湯の枝折には更に幾多の研究分野が残る。本文批判、諸異本の校合、定本の作成、著者の確認等々である。道はまだ遠い。

箱根に関するもろもろの学問の終局点——若しこれを箱根学とよぶ事が許されるならば——私はこの七湯の枝折の釈文の稚拙さをいっつか忘れてしまつて、その速い道の「箱根学」に志すトオチ・ランプの担い手であるかの如き錯覚に落入ってしまう。努めて自戒精進して他日を期したい。